

山
峽
の
灯

私の
雑記帖
III

添
田
知
道

九八二年三月十八日（先生の命日に……）

著 者

添田 知道

印刷者

望 月 憲

大宮市桜木町四ノ四四四番地

発行所

素面の会

大宮市桜木町四ノ四四四番地

限定五百部

無料

山
峽
の
灯

私の
雑記帖Ⅲ

添田
知道

目次

山 峡の 灯 さんきやうひ	5
風 来の 唄 ふうらいうた	34
浅 草公 園裏 あさくさこうえんうら	66
純 白の 情熱 じゆんぱくじやうねつ	102
男 の 火 花 をとこひばな	141

山峡の灯

「ああ、ああ、あ、あ、ああ……」

声を出してみたが、ガサ／＼で、てんで話にならない。星川は顔をしかめて、湿布の上から咽喉をさすつた。

（こいつは、とても、うたへさうもないぞ。）

彼は新米の演歌師である。旅の空でこんなことになったのは、情ない。なんとも心ぼそい。こんなことなら東京を出て来るんぢやなかった。さう、悔いる気もちもしきりに湧いて来るが、しかし、今更悔いたところでどうなるものでもない。

東京の縁日で、仲間にくれと先輩の演歌師に頼み込んだが、相手にしてくれない。勝手にやれ、と突ッ放されて、片隅でやつてはみたが元より太刀打ちにならう筈もない。折角集めた人もみんな向かうに取られてしまふ。彼はヴァイオリンを正則にやつて自信を持つてゐる。しかし、たのみの綱のそれすら人を集める力にはならなかつた。先輩達の嘲笑ふ声に、彼は憤つた。よし、今に見ろ。己は旅で腕を磨いて来る。——それが、十日目には、この始末なのだ。

安宿のくすんだ障子が蒼然と暮れてきて、ひし／＼と山気が寄せて来るやうだ。ぞくりと寒気がして、頭が痛い。かてゝ加へて風邪気味なのだ。じつくりと温泉にあたゝまつてそのまゝ寝てしまひたい。然しさうはいかなかつた。どうにも商買に出なければ、宿銭がないのだ。塩原に来て、三日、もう宿銭を食ひ込んでしまつて、——帳場の前を通つて出入りするのさへ、じろ／＼と見られるやうな気がして、不安でならないのである。

温泉宿の灯が、層をなして連らなつてゐる。その裾を、さゝやかな音を立てゝ水が流れてゐる。星川は腰からヴァイオリンを出すと、調子を合はせはじめた。ヴェー、ヴェー、ヴェー。その音が、重い晩春の夜気に吸はれてゆく。すると、頭の上の障子があいて、人影が欄に寄る気配が

感じられる。

彼は苦痛を堪へて、うたひ出した。

春はヴェニスの宵の夢

涙に夢も泣きぬれて

さぐれの真珠と

なぞらふ泡沫の……

彼はうたひながら、泣きたくなつた。まるで嘔れて濁つて、唄にも何もなつてゐない。我ながら聴かれたものではない。しかも、咽喉は血が出るやうにひり／＼する。——パタリと、頭の上の障子がしまつて、クス／＼と笑ふ声が洩れてくる。

駄目だ。——自分から耳を蔽つて逃げ出したいくらゐだつた。しかし、逃げられないのだ。やらなければならなかつた。

笑はれた窓下に止まつてゐることが出来ず、うたひながら逃げるやうに歩き出した。恥と苦痛に、汗の出る思ひだつた。——駄目だ。己は到底演歌師にはなれない。歌詞は美しいが、この己

の聲こゑの醜みにくさ。

灯ともしびやつれて春はるは逝ゆき

櫓うはさぐなみにさゝやきぬ

たゆたふ小舟こぶねに

迷まよへる悲歌ひかをのせ

儚はかなき別わかれを偲しのぶらん

と——うたつてゐた彼は、わが耳みみを疑うたがふやうに、すました。彼の聲こゑはガサ／＼に嘎かれ切きつてゐるにも拘からず、聴きこえるのは、澄すみ切きつた声こゑの、素晴すばらしい節廻ふしまはしだつた。そんな筈はずはない。そんなバカなことではない。己おれはこの通り咽喉のどが傷いたんでゐる。だが、流れに乗のるさゝ舟ふねの如ごとくにも、彼のヴァイオリンにびつたりと合あつて、爽さうりやう嘯せうとひびく唄声うたごゑである。——行く手ての温泉宿ゆやどの二階かいからも三階がいからも、彼かれの方ほうを覗のぞき込んでゐる顔々かほだ。——をかしいぞ。

ひよいと振り向むいた彼は、

(あ!) 思おもはず、ヴァイオリンの手てが止とまつた。

をんな
女だ。

女が、彼の肩に寄り添ふやうにして、うたつてゐるのである。うたふ眼元に微笑が寄つて、それが目くばせであつた。首を左右に振つて、

(止めないで、止めないで——)

さう云つてゐるやうである。彼のヴァイオリンが途切れた間も、女の美しい唄はつゞけてゐる女の目くばせで、星川はどぎまぎしながらも、ヴァイオリンを弾きつゝいた。

(一体、此の女は、何者だらう?)

弾きながら、彼は不思議でかなはなかつた。如何にも唄がうま過ぎる。只者ではない。——狐ではないか。彼の窮地へ舞ひ下りた天女か。——童話めいた幻想にひたつてゐた星川は、

「——唄本を頂戴！」

さう云つて走つて来た宿の女中らしい声で、現実にはき戻された。彼が唄本を出さうとするよりも早く、すつと、女の手で彼の懐の唄本が抜かれ、

「はい、ありがたう。——さア、最新の歌が全部揃つてをります。御希望の方はどうぞつゞいて、

——只今ただいまのはヴェニスふなうたの舟唄ふなうたです。」

涼すずしい声こゑが、堂だうに入いつてゐる。——これはたしかに狐きつねだ。——誘さそはれるやうに、後あとから後あとから

丹前たんぜんの客きやくが寄よつて来きては、その手てから唄本うたほんを買かつてゐる。

星川ほしかははうなるばかりだつた。一体たいこれはどうしたといふことだ。——その時とき、彼かれは女おんなの錦紗きんしやの羽織はおりの袖そでから覗のぞいてゐるものを見みた。女おんなもヴァイオリンおんを抱かかへてゐるのだ。

(女演歌師おんなえんかし?) ——仲間なかまなのか。

2

「さ、いゝから、弾ひいて。——そして、咽喉のどがいたくても、我慢がまんしてうたふのよ。」

物問ものとひたげにする星川ほしかはを、追おひ立たてるやうな女おんなだつた。追おはれるやうに星川ほしかはは、ヴァイオリンを弾ひき、うたひつゞけて、温泉町ゆまちを流ながして行いつた。女おんなは影かげのやうに添そつて、どこまでもうたひ添そへてくれた。

彼かれは憑つかれたものゝやうであつた。女おんなの美うつくしい声こゑが、そのまゝ自分じぶんの声こゑのやうな氣きがしたり、

女はずつと前から彼と一緒に歩いてをり、これからもずつと一緒に歩いて行くものゝやうに思はれたり、——夢の中を歩いて行くやうな気もちであつた。

橋の上に来た。そこはもう温泉町の外づれであつた。昼間なら、遊覧客や湯治客が足を止めて溪流の美しさを覗くところだつた。溪からはむせるやうな若葉の香がわき立ち、その底をくぐる水の音がうき上がつて来るやうである。

女は、すいと星川の脇から離れると、欄干に倚つて、暗い溪へ、ちつと眼を捨てゝゐる。物憂げな横顔の、吸ひ込むやうな魅力だ。すらりとした女の腰の線に、五月の匂ひがあつた。

「——一体、あなたは？」

と云つて星川は、おづ／＼と、寄つて行つた。

「——誰だつて、いゝぢやないの。」女は振り向いて笑つた。

「でも——」

「でも、なんなの？」

「あなたは、やはり——」と云ひかけて、星川は女の小脇のヴァイオリン袋へちらと眼をやつた。

「——えゝ、あんたの、お仲間よ。」

女の方で、あつさり云つてのけた。

「あんたはまアだ、——新米だわね。」

「——」

「あゝ、これ、あんたの売上げ——」

さう云つて女は金を皆、星川に渡さうとした。

「だつてそれは——」

若し相手が仲間なら然るべく分配をしなければならないものだらう。

「そんなこと、いゝのよ。仲間は相見互ぢやないの。」

女は無理に、星川に擱ませてしまつた。女のしなやかな指が、彼の拳にからむやうであつた。いや、彼の心にからんで来るやうであつた。

「——わたしにだつて、今のあんたのやうなことがあつたのよ。辛い、よくわかるわ。——でも、今止めちや駄目よ。辛くてもうたふの。咽喉から血が出るまで、うたひ抜くの。それを通り

越して、やつとほんとの咽喉になつて来るんだわ。」

さう云つていたはる姉のやうな眼ざしを感じて星川は、見知らぬ女の友情に、ぬく／＼と溺れて行つた。顔を得上げず、

「——ありがたう。やります。しつかりやります。——おかげで今夜は助かりました。それにしても、あなたの——」

「名なんぞ、いゝぢやないの。——又いつか、何処かで、逢ふこともあるでせう。その時、一人前になつてゐてくれゝば、それで、わたしはうれしいわ。」

女は、ついと欄干を離れて、温泉町の方へ歩き出した。

「あ、——これを」と星川は、金を掴まされた拳を突き出して、二三歩追つたが、女は振り向きもせず、足を早めて行つてしまつた。

3

「——おゝ、お町。商売はどうだつた？」

内湯旅館うら梅の二階座敷へ入つてきた女演歌師へ、長火鉢の脇へごろりと寝てゐた男が、むくりと体を起こした。

（顔を見るなり、これだ。この人は——）

下から見据ゑてゐる男の顔が、浅ましいものに見えて、お町は情ない思ひで視線を外らし、するりと脱いた羽織を衣桁にかけながら、

「あんたの方は、どうしたの？」

「——すつてんでんさ。だからお前の帰るのを待ちこがれてたんだ、」

「駄目よ、あたしの方だつて。」

「なに？」

「商売なんか、しやしないんだから。」

と、そむけたまゝの顔で、坐るのへ、

「嘘をつけ。——ちやんと、うたつてゐるのが聞こえたぞ。」

「違ふのよ。新米の演歌師が声嘎れで困つてゐたんで、助けてやつただけよ。」

「なにッ？」

「

険しい顔でつめよるやうな男へ、お町はふいと横を向いた。

——お町はなんとも情ない気もちであつた。これがあの学文路一家の实子新之助の姿であらうか。きび／＼した男前であつた。勢力ある一家の息子に想はれるといふことは、それが女の身で演歌師として街頭に立たねばならなかつたやうな、衰へた一香具師の娘にとつては、身にあまる嬉しさであつた。だからわけもなくその愛情に身を委ねてしまつたのだ。が、違つてゐた。新之助をしやんとした男に見せてゐたのは、一家の権勢であつた。新之助自身は、その勢力に甘やかされた放縱無頼に過ぎなかつた。てきやとして何の商売もほんとうに身につけてはゐなかつた。身についてゐたのは手なぐさみの癖だけであつた。お町の稼ぎが、それにつがれて行つた。お町はそんな金のことに拘るのではなかつた。何も男の蔭にかくれて荒い風をいとはうとする女の習ひに従ひたいのではない。たゞ、男にも、男としてひとり立ちがしてほしかつたのだ。どんな小やかなことでもいゝ、しやんと立つてくれるなら、共に生きるといふのなら、どんな苦勞も厭ひ